

●What's EBM ? ⑦

「タバコ」と「長生き」

中山 健夫

I. WHO の秘策とは？

前回は分母に注意することの大事さをお話しましたが、今回はその応用編を、公衆衛生の一大テーマ、タバコ問題と共にお話ししましょう。

いろいろな健康情報が世の中に飛び交っていますが、もっとも身近で大切な話題の一つがタバコに関する情報です。パッケージには健康に害があると書かれたり、電車や飛行機でも禁煙席が増えてきたりと、マスコミも「愛煙家の肩身が狭い」と書いたりしますが、まだ男性の半分以上が喫煙者の日本、欧米とは比べものにならないタバコ天国です。ちなみに先進諸国における男性喫煙率は約30%で、日本の半分ほどです。女性は欧米が20%前後に対して、日本は10%ほどなのですが、若い女性の喫煙が増えていることは残念です。

厚生労働省は喫煙対策を進めようとしているのですが、タバコは莫大な税金のもととなっているため、足並みがそろいません。「喫煙者が減ったら税収も減る」と心配されているのですが、これに対しては国際保健機関（WHO）の提案が有効です。それは「タバコ税の値上げ」なのです。1箱あたりのタバコ税が上がってタバコ自体が値上げされれば、それを機会に禁煙する人も増えるだろうし、「どうしたってタバコを吸いたい」人たちがそれまでより高い税金を払ってくれるわけだから税収の方も減らないですむ、というわけです。スモーカーにとって

頭の痛い話かもしれませんが、健康と経済を天秤にかけようとするなら、財務省もせめてそのような合理的な政策を進めて欲しいものです。

II. タバコ会社の「先送り戦術」

世界ではほぼ、タバコの健康への悪影響が政治の世界でも一般社会でも認められているのですが、日本はまだまだの感がぬぐえません。今でも「タバコの害は疫学的にしかわかっておらず、科学的に完全に証明されているわけではない」という主張が聞かれることがあります。「完全な証明」など待っていたらみんな死んでしまいます。こういう理屈が通りかねないのは、疫学という人間を対象とした実践的な科学が認知されてこなかった日本の悲劇です。

これと同じ「先延ばし戦術」は、かつての水俣病でも見られました。「工場廃水に汚染された魚を食べることが病気の発生と強く関連している」と疫学的にわかったにもかかわらず、「完全に原因がわかったわけではない」からと言って対策を遅らせている間に、新潟で第2水俣病が発生したのです。ようやく近年になって「生産者重視」から「消費者重視」の政策に変わりつつあるといわれますが、生産者からはどうしても自分に不利な情報は出にくいものです。「JT がタバコは大丈夫と言っていたから吸っても大丈夫」と思っている人も少なくないのは残念なことです。

III. 長生きの愛煙家…？

日本ではまだタバコの害が十分に認められていない、とお話しましたが、それに関連して

時々こんな話が聞かれます。「タバコを吸って
いなくたって早死にする人はたくさんいるし、
長寿で有名だった泉重千代さん（ギネスにも乗
った昭和時代の長寿スター）は愛煙家だっ
た」—だからタバコが健康に悪いなんて言えな
いじゃないか、というわけです。

人間は身近な出来事にひっぱられがちで、全
体の傾向まで思いが至らないのはよくあるこ
とです。よくよく考えてみると、タバコを吸っ
ていなくて早死にした人もいるかもしれませんが、
タバコを吸っていて早死にした人はもっと
たくさんいるのです。「幸運な生き残り」であ
った泉重千代さんのエピソードだけで、全体的
なタバコの影響を判断してはいけません。

次のお話のもっとだまされやすいかもしれま
せんが、いかがでしょうか。

「この町には80歳以上の男性が10人いて7人
は結構な喫煙家です。長生きしているのは喫煙
家の方が多い。タバコは本当に身体に悪いので
しょうか？」

確かに数字を見るとこの町では喫煙している
方が長生きのようです。単にこの町は例外で、
他の町を広く見渡せば、喫煙者の方が長生きで
きない、ということがわかるのでしょうか。…
実はどこの町を調べてみても、出てくる数字は
これと似たり寄ったりなのです。そして、それ
にもかかわらず、喫煙している方がやはり寿命
が短いのです。このトリックを見破ることがで
きますか？

そのカギは「分母」に注意することとデータ
を断面ではなくて「追跡」で調べることです。
20年前の様子を想像してみましょう。この町に
60歳以上の男性は100人いたとします。そのう
ち喫煙者は80人、非喫煙者が20人でした（昔は
男性の喫煙率は8割を越えていました）。ここ
から追跡をスタートして20年後の現在に戻りま
す。もと100人いた町の男性も80歳を越えるま
でに多くの方が亡くなって、結局、初めに喫煙
をしていた7人と喫煙をしていなかった3人が
生き残って合計10人になりました。つまり、80

歳までの生存率を考えると、喫煙者は7人/80
人で9%、非喫煙者は3人/20人で15%となり、
長生きする確率が高いのは非喫煙者という結果
が得られます。“トリック”はこの計算ではな
くて、生き残りの人間だけ見せてタバコを吸っ
ている方が長生きだ、という情報を流す方なの
です。

情報を評価する時には、分母を見ること、横
断研究ではなく追跡研究を大事にする、という
EBM や疫学の基本技を知っていれば、こんな
トリックにひっかからずにすむわけです。

IV. タバコ会社のお金攻勢？

1998年のJAMA¹⁾に興味深い論文が掲載され
ました。MEDLINE と EMBASE を使って1980
年から1995年に出版された受動喫煙の害に関す
る106の論文を調べた結果、タバコ産業から研
究資金をもらった研究者は、そうでない研究者
に比べて、何と88倍も多く受動喫煙の危険性を
否定する論文を書いていた、というのです。し
たがって著者は論文を書く際には研究資金の出
所を明記すべきであり、読者も著者の研究資金
の出所を考慮して論文の正当性を判断すべき、
と結論しています。

日本では研究費が十分記載されていないこと
も多いですし、何よりタバコ会社は研究費の提
供先は非公開です。社員か株主など限られた関
係者が見られるニュースには、資金提供をした
研究者名が出ているようですが、このような状
態で、研究成果を正当に評価することは容易で
はありません。今の時代、医学研究者の倫理と
責任という意味からも、一層情報の公開を進め
ていくことが必要といえるでしょう。

参考文献

- 1) Barnes DE, Bero LA : Why review articles
on the health effects of passive smoking
reach different conclusions. JAMA. 1998 ;
279 : 1566-1570.